はやね はやおき 朝ごはん テレビを止めて外遊び

# きずな

～きらきら にこにこ いきいき～

平成２８年度
別海町立上西春別小学校
学校だより №9
平成２８年１１月３０日
発行責任者
校長 横 澤 英 三

## おりづるの旅

突然降ってわいたアスベスト騒動。御迷惑をおかけしています。調査・分析にかなりの時間がかかるようで、２学期中はストーブによる暖房を続けざるを得ない状況です。

さて、久しぶりに「お話朝会」の順番が回ってきました。今年の5月、アメリカ合衆国のオバマ大統領が、サミットで日本を訪れたとき、広島を訪問したことは、記憶に新しいことです。その時、大統領は広島平和記念資料館を見学し、４羽の折り鶴を寄贈しました。なぜ大統領が折り鶴を寄贈したのか、その理由について、絵本を使ってお話ししました。

使った絵本は、うみの しほ作 狩野富貴子絵「おりづるの旅 さだこの祈りをのせて」PHP研究所。

広島平和記念公園にある、原爆の子の像のモデルとなった、佐々木禎子さんのお話です。こんな概要のお話です。

さだこと、まさひろは仲良しの姉弟です。いつも通り、朝ご飯がすんで、遊んでいたときです、ピカッ！っと、まぶしい光に目をつぶった瞬間、ドーン！何もかもがしたから突き上げられました。1945年８月15日、広島に原爆が落とされました。この一発の原爆で亡くなった人は、この年だけで、およそ14万人。その後も原爆の放射能による「原爆症」でたくさんの人が亡くなります。

1954年、戦争が終わって９年、さだこは小学校６年生になりました。首の腫れが気になったさだこは、年が明けた冬休み中にお母さんと一緒に病院へ行きました。診察の後、お医者さんはお母さんを呼び、さだこが原爆病であること、余命が半年であることを告げました。お父さん、お母さんは、この事実をさだこに伝えることができませんでした。さだこのクラスメイトたちは、交代で入院したさだこを見舞い、励まし続けました。

８月に入ったある日、看護婦さんが名古屋の高校生から送られてきた千羽鶴を持って、病室にやってきました。そして、「昔から、折り鶴を千羽おると願いがかなうといって、縁起が良いの」と言いました。それを聞いたさだこは、顔を輝かせて、同じ病室のきよさんと一緒に鶴を折り始めました。

さだこは我慢強い子で、どんなに辛い検査や治療にも、泣き言を言ったことはありません。しかし、同じ病院に入院していた５歳の女の子が、原爆病でなくなったとき、さだこは初めて声を上げて泣きました。「うちも、ああして死ぬかもしらん。うちは死にとうない」。さだこは、自分が原爆病にかかっていることも、この病気が進めば、死ぬということも知っていました。さだこは鶴を折り続けました。お母さんが止めても、折り続けました。体調が悪くても、折り続けました。一羽、また一羽と折り続けて、とうとう千羽を超えました。

しかし、冬が近づく頃、さだこの命の火は今にも消えようとしていました。お父さんはさだこの耳に「さだこ、何か食べたいもんはないか」と呼びかけました。「おちゃ…づ…け」。かすれた声に、弟のまさひろが病室を飛び出しました。「お茶漬け。さだこにお茶漬け食べさすんじゃ」。まさひろが食堂で買ってきたご飯に、お母さんがお茶を注ぎました。スプーンでそっとさだこの口へ運びました。一口、二口すすって、さだこは目を閉じました。1955年10月25日、原爆が落とされてから10年目、さだこは12歳で亡くなりました。枕元の箱には、指先ほどの小さな折り鶴があふれていました。

さだこの葬式でお父さんは、同級生たちにさだこが折った鶴を形見に分けました。「さだちゃんじゃのうて、私が死んどったかもしれん」「原爆はもういやじゃ。戦争なんて、なくなればええのに」。同級生たちは、泣きながら話し合いました。「そうだ。原爆が繰りかえされんように、原爆で亡くなった子みんなの像を作ったらどうだろう」。

こうして、同級生たちは募金活動を行いました。その結果、今の価値にして5000万円の募金が集まりました。そして、さだこが亡くなって３年後の1958年、広島平和記念公園央に、「原爆の子の像」ができあがりました。

さだこと折り鶴、同級生たちと「原爆の子の像」の話は人々の心を打ち、本や歌、劇となって、いろいろな国に広がっていきました。

オバマ大統領は、この話を知っていて、折り鶴を寄贈しました。世界から核兵器がなくなることを祈ります。

校 長　横澤 英三